

太政大臣・左右大臣の座

- 平安宮朝堂院昌福堂跡の調査 -

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 昌福堂の基壇延石(西から)

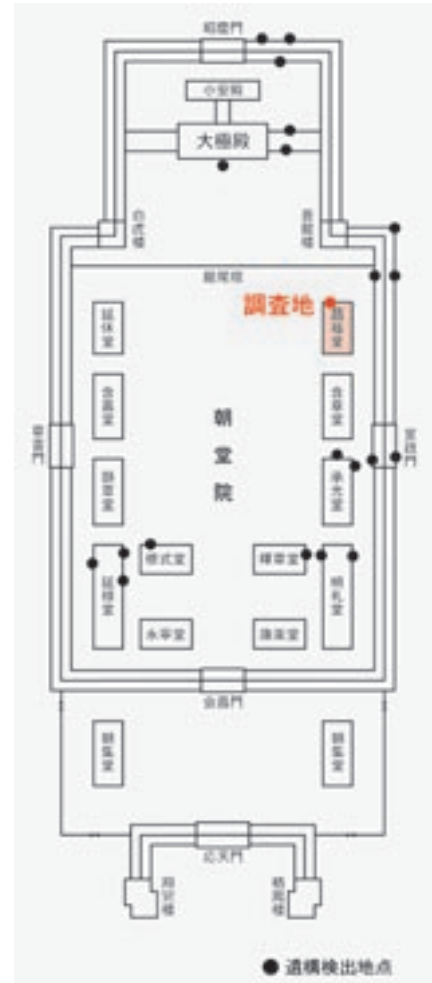


図1 朝堂院

はじめに 延暦十三年(794)、桓武天皇は、都を長岡京から山背国葛野郡に移しました。古代都城の最後を飾る平安京の始まりです。

平安京の中でも、国家の中枢部といえるのが、平安宮です。天皇の居住空間である内裏、役人が政務を行なう諸官衙や、国家の政治の中心である朝堂院がありました。

朝堂院は、もっとも重要な施設として平安宮の中央部に位置し、延暦十五年(796)に完成します。

その後、2度火災で焼失し、再建されましたが、治承元年(1177)の火災で焼失した後、再建されませんでした。

朝堂院は、大極殿、朝堂、朝集堂と大きく3つの区画にわかれています。大極殿では、天皇即位の儀式や、外国使節の謁見が行なわれました。朝堂は、国家の政治を行なう場所として左右対称に十二堂があり、身分や役所ごとに座る場所が振り分けられていました。

朝集堂は、役人が朝堂に入る前の待機場所として使用されました。

朝堂院跡の調査は、数多く行なわれていますが、家屋が密集していること、京都所司代の屋敷があったこと、壁土に使う聚楽土の採取が行なわれていたこと、などの理由で、まだまだわかっていないことも多くあります(図1)。

朝堂院昌福堂跡の調査 2007年6月、朝堂十二堂の中で、東第一堂である昌福堂跡の発掘調査が初



1 地面にそのまま据え置く



2 地面を掘り込んで据える



3 土を入れて高上げる

写真2 延石の据え方

めて行なわれました。平安時代の施行細則である『延喜式』によると、昌福堂は、太政大臣・左大臣・右大臣の座とされ、十二堂の中でも、もっとも格式が高い建物の一つでした。また、国家の安泰を祈る仏教儀式である御齋会では、僧侶に布施を渡す場所としても利用されています。

今回の調査では、昌福堂の基壇の北端を確認することができました。この基壇は壇上積基壇と呼ばれるもので(図2)、見つかったのは、最下部を構成する「延石」です。延石は、凝灰岩(火山灰が堆積して固まった石)の切石が用いられており、計4石分、東西約3mにわたって並んでいました(写真1)。1石の長さは約100cm、幅は34~38cm、厚みは11~21cmあります。延石の南側には基壇の盛土も一部確認できましたが、柱の痕跡は見つかりませんでした。

調査でわかったこと 今回見つかった延石は、それぞれ厚みに違いが見られます。これらは、地面にそのまま据え置く(写真2-1)ほかに、上面を揃えるために、地

面を掘り込んで据えたり(写真2-2)、延石の下に土を入れて高上げしたり(写真2-3)していました。厚みの違いは、昌福堂の延石の為に切り出されたものではなく、別の場所から転用していることを示しています。

さらに、昌福堂の北端を確認したことは、朝堂院の正確な復元を行なう上で大きな成果になりました。これまで、大極殿と朝堂を区切る龍尾壇の位置がはっきりとしませんでした。しかし、平安宮の指図である陽明文庫本『宮城図』に、昌福堂北端と龍尾壇の間は七丈三尺(約21.9m)との記載があり、龍尾壇の正確な位置が明らか

になりました。

また、昌福堂基壇の規模が、南北十丈九尺(約32.7m)であることがわかり、朝堂十二堂が左右対称とされることから、西第一堂である延休堂の位置と規模も明らかになりました。

まとめ 家屋が密集する平安宮跡の調査は面積も狭く、一つ一つは点でしかありません。しかし、点と点を繋ぐことによって、やがて線となり面となって、平安宮のより正確な復元を行なうための、貴重な資料となるのです。今後も詳細な調査を行ない、平安宮の具体的な姿を明らかにしていきたいと考えています。(西森 正晃)

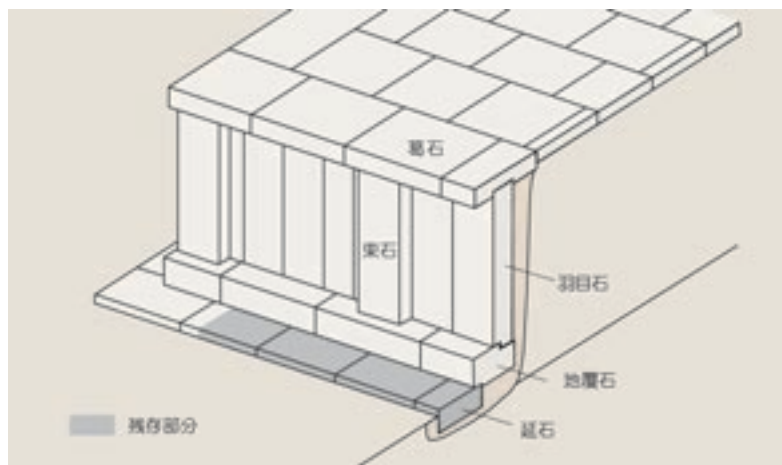


図2 壇上積基壇の模式図